

若者の今とこれから

—くいま・ここ>から若者を問うということ—

松 橋 達 矢

1. はじめに

2013年度日本大学社会学会大会のテーマ部会「検証 若者の今とこれから」は、中瀬剛丸会員による企画のもと、立道信吾会員、久保田裕之会員、小池高史会員、そしてNPO法人POSSEの代表として「ブラック企業」や雇用をめぐる諸問題を中心に学界内外で活躍されている今野晴貴氏を報告者として開催された。2013年7月27日(土)という夏季休暇開始前後の多忙な時期にもかかわらず、フロアにお集まりいただいた会員(28名)・非会員(43名：うち本学学部生38名)の皆様には、まずもって厚く御礼申し上げたい。

当日を迎えるにあたっては、十分な時間を確保できないながらも、報告者間による報告内容の共有や議論の方向性の模索を目的とした打ち合わせや討議等も行った。こうした報告者の方々の様々なご尽力のもとで成立したテーマ部会であるが、時間的制約やコーディネーターを務めた筆者の不手際もあり、必ずしも各人思うような形で論じていただけなかったこと、またフロアの参加者の方々の質疑応答を十全にこなせなかったことを大変申し訳なく思っている。

以下では、本テーマ部会当日の各報告や討論内容に触れていくわけであるが、通常こうした「解題」は、テーマ部会当日の模様を正確に「記述」し、わかりやすい形での「歴史」としてまとめていくことが主眼となる。本稿も大まかにはそうした趣旨のもとで記していくこととなるが、それに加えて四名による報告と議論を踏まえた上で、筆者が疑問に感じ考えた点を「解題」としてまとめさせていただくことをお許し願いたい。

2. 「若者」を問うこと①——「若者」の多様化と「若者」論の困難

さて、本題に入るにあたり、そもそも「若者」を問うことにどのような

(社会学的な)意味と意義が存在するののかについて、まずもって触れておく必要があるだろう。「若者」は絶えず人々の関心にのぼる存在であることは周知の事実であろうが、斯学においてもそうした傾向は変わらない。試みに日本社会学会社会学文献情報データベースを用いキーワード「若者」を検索すると415件の論文がヒットするが¹⁾、1940-50年代の村落研究(若者組・若者仲間)にはじまり、60-70年代の政治運動や対抗的文化の担い手としての「発見」、70年代以降のサブカルチャー研究や青少年研究との接続、80年代における「世代」論(所謂「新人類」と消費社会論の交差、90年代の精神病理や人間関係の特異性への着目など、多岐にわたるテーマや関心のもとで社会学者の耳目を集めてきたことがわかる。

とはいえ、〈いま・ここ〉において「若者」をひとつの同質的な「あつまり」(≡同質的な集団)として捉えようとする、様々な困難に行きあたることもまた事実である。この点を達意に論じた浅野智彦は、2000年代以降に現れた「若者」論を、1)1990年代から継続する人間関係の独自性に着目した論(Ex.友人関係、家族関係の優越、地元志向の強まり等)、2)社会経済的変動による「若者」の周辺化に着目した論(ニート・フリーター化、未婚化・晩婚化、少子化等)、の二つに分類する(浅野 2012a:1367)。この分類を通じ浅野は、位相の異なる論点を有する「若者」の問題を整理するのみならず、これらの二つの方向性を示す「若者」論が同質的な「あつまり」としての「若者」像を異質化する方向で機能してきた点(「リアリティの喪失」)、そしてその背景には両者の関係性を結びつけていた一定の「社会的条件」の崩壊という現実(「(広義の)社会構造の変質」)を見据えているという意味である種の同型性を孕んでいる点を論証するのであるが(浅野 2012b:9-12)、浅野によるこの示唆は2000年代以降の「若者」ないし「若者」論の多様化という事態が意味するものを考えるうえで非常に興味深い。

2000年代以降の若者論を振り返ると、「若者」の雇用と「自己責任論」の関係性をめぐり、1990年代後半の「心の闇」を抱えたネガティブな「若者」像(Ex.酒鬼薔薇事件)の影響を受けつつ、「若者」の「荒れ」や「至らなさ」の原因を(「若者」自身の)「内面」に求めるという意味での「未熟」な「若者」の失敗を非難する「俗流若者論」(後藤和智)と、産業構造の変化や労働市場の流動化といった構造的要因を見据えつつ、階層や性別、地域や学歴といった「若者」像の背後に押し込められた多様性にデー

タをもって接近していく「実証的若者論」のあいだの対立と相克が大きな潮流を占めていたように思う。1980年代までは社会において機能していた学校教育から労働市場への移行過程に大きな失調をきたすのと同時に、規制緩和や構造改革など新自由主義の政策形成に即して国家統治システムの構造再編が進展した1990年代以降、予測不可能なリスクへと対処するセーフティネットへのアクセスを持たない「若者」は、多かれ少なかれ社会経済的な苦境へと身を置くことを余儀なくされてきた。こうした「若者」を前に、2000年代前半には、フリーターやニート、非正規雇用に陥った「若者」の就労意識の低さや、「自分探し」に没頭し社会との接点を持つとしない「未熟さ」、規範意識の低さをなじるような「自己責任論」的な言説が量産されたことは記憶に新しい。

それに対し2000年代半ば以降、統計的事実や自然科学的知見を無視した「若者」の「自己責任論」の雑駁さに対する非難が若者自身から語られるようになると、「若者」論を語る「若者」自身の多様性が表に現れるようになる。小谷敏は、2000年代半ば以降の「若者」による「若者論」を、後藤和智や赤木智弘など団塊ジュニア・真性団塊ジュニア世代（三浦展）による「若者」論と、古市憲寿など現在の10・20代による「若者」論のあいだの大きな隔たりを好況期の経験の有無に注目し考察しているが（小谷 2013：5-7）、このことは図らずも先の「若者」ならびに「若者」論の多様化という事態を浮き彫りとした。

後藤や赤木らの世代は、社会に出るまさにその時にバブル崩壊のあおりを受けての不況が訪れた結果、心の準備もできず就職氷河期を迎えるにいたった。それ故に初職の入りに躓き、それが現在のライフコースにも大きな影響を及ぼしているという意味で、ライフコースの均質性が大きく崩れた初めての世代であるといえよう。山田昌弘は、従来のライフコースのあり方をパイプラインにたとえ、1990年代以降に生じた変化をパイプラインに入ったヒビの拡大とそこから漏れる人々の増大と表現したが（山田 2004：165-6）、亀裂から漏れ出た学生が非正規雇用（フリーター・ニート）へと流れ出し、そこからもとに復帰するための道筋は今もって示されず、まったくもって明日に希望が持てない、バブル世代や親の世代はそんな苦勞をしていないのに私たちだけ、という思いを後の世代に比べると強く持っている。そうした社会的な成功を謳歌した「大人」に対する相対的剥奪感と強い憤りを背景に、当時学部生であった後藤やフリーター経験を

経てジャーナリスへの転身を図ろうとする最中に編まれた赤木の「当事者」としての言説は、税制や社会保障による再分配前の所得格差を焦点とした日本型格差社会論のその後の興隆と相まって、社会に広がる格差や不平等、結果としての「貧困」が可視化・主題化されていく中で、大きなリアリティを持つにいった。

それに対し、不況が続き就職難に直面するであろうことは「予定された運命」として受け止めることが「当たり前」な希望なき状況において、「自己実現」や「他者からの承認」欲求をあきらめ、自分たちなりの満足を追い求める「若者」像を積極的に肯定する古市の編み出す言説がメディアにおいて大きく取り上げられる背景は、これとは毛色が異なる。無論、後藤や赤木らのように（「若者」としての）言説の「当事者」性に裏打ちされた、あるいは「若者」という「当事者」の「声」を代弁しているという側面も確かにあろう。しかしながら小谷も述べるように、それ以上にそうした「当事者」性を纏いながらも、「大人」と「若者」の双方を鎮めようとする「冷静さ」が、少なくとも責められる立場に反転した「大人」にとっても受け入れられやすかったという点の方がより大きいものと考えられる。

そもそも、東大大学院博士課程・社会的企業家・ライターという三足のわらじをはく古市の「当事者」性は、ピースボートに参加する「セカイ型」の若者の「当事者」性を代弁し得たとしても、就労環境が悪化に伴い地元回帰を志すような郊外や地方における若者ないし非正規雇用に身を置く都市部の若者の「当事者」性とは決して重ならない。例えば轡田竜蔵は、地元志向を志す若者の「決して明るくない自分の将来展望を語りながら、それでも『地元生活』がもたらすささやかな包摂の感覚によって、ぎりぎりのところで自らの存在を支えている」「当事者」のリアリティに触れているし（轡田 2011：208-9）、阿部真大のバイク便ライダーのエスノグラフィーは、フリーターのディスポーザルな労働にも熟練はあり、そうした熟練の中にやりがいや自己実現を見出すことで経済的にも存在的にもギリギリの自分自身をどうにか支えている若者が陥る悪循環を描いている（阿部 2006）。古市による「現状への高い満足度」テーゼや「（夢を見させるのではなく）あきらめさせろ！」言説は、こうした若者の経済的・存在論的不安を個人の問題として処理してしまう危険性を産みだすのみならず、「自分の能力を生かそうとする活力」に乏しい、「ニュー・エコノ

ミー」がもたらす「希望格差社会」(山田昌弘)の底辺層として(「若者」を)固定化していく現状を肯定する方向にもつながりかねない。事実、古市の「若者」論は、その後「大人」「若者」双方からの批判にさらされたが、結果的にそのことは同質的な「あつまり」としての「若者」像の崩壊を人々に認識させるとともに、(「大人」「若者」問わず)「若者」論に対するある種の不信感へと結びついていくこととなる。

3. 「若者」を問うこと②——周辺化する「若者」と「多様化」する生存戦略

それでは古市が陥った陥穽を回避しつつ、「若者」の多様性を「冷静さ」を持って捉えるにはどうしたらよいのか。また、同質的な「あつまり」としての「若者」像が掘り崩されつつあるくいま・ここ>において、(「あつまり」としての)「若者」を問うことは本当にその意味を消失したのだろうか。本章では、テーマ部会における4氏における報告と討論内容等を中心にこの点を考えていきたい。

ところで、本テーマ部会の企画段階からではなく途上からコーディネーターの役割を拝命した筆者は、設定されたテーマ、ならびに報告者4氏の研究分野や関心領域を前に大きな戸惑いを覚えていた。「若者」論という専門外のテーマを前に、こうした部会のコーディネート経験に乏しい筆者が無意味にテンパったというのが事情の大半である。ただそれとともに、労使関係や雇用システムを対象にシンクタンク時代から研究を続けている立道会員、家族ではない他人との共同生活実践に関する調査をもとにして、家族を超える親密性/ケア/生活の共同性に関する理論的な研究を行っている久保田会員、高齢社会と高齢者に関する研究をもとに、団地居住の高齢者の社会関係や若者と高齢者の類似点に関心を持つ小池会員、そして労働法を入り口として雇用政策研究を続ける一方、若者自身による労働問題解決を目指すNPO法人POSSEを主宰し、労働相談に乗り続ける実践家としての顔も持つ今野晴貴氏という4名の報告者諸氏の報告内容を「若者」論としてどのように結実させていくのかという点、すなわち多様化する「若者」ないし「若者」論をいかにして方向づけていくのか、という筆者の手に余る大きな課題を前に呆然としたというのが率直な表現かもしれない。

大会直前の事前打ち合わせの段階までに筆者が行ったのは、近年の「若

者」研究を概観しながら、報告者4氏の先行研究や報告内容を整理した上で、議論を方向付けるための土台を設定する作業であるが、その際に特に注視したのは「若者」ないし「若者」論を成立させていた一定の「社会的条件」の崩壊という現実（「広義の」社会構造の変質）であった。この点については、筆者も報告者として参与した2011年度本学会大会のテーマ部会「無縁社会を問う—ジャーナリズムと社会学の対話—」において見い出された、労働・雇用市場の流動化に伴う雇用の悪化（「社縁の崩壊」、未婚・晩婚・離婚、そして単身者世帯の増加による結婚と家族の変容（「血縁の希薄化」）、そして前世紀から続く地域社会を中心とする共同体喪失（「地縁再構築の困難」）という、「無縁」化に直面するセーフティネットを失った人々の「生と死」の実情といかに向き合うのか、という課題とも響きあうものである。幸いにして、今回の報告者の4氏はそれぞれの専門領域に応じて、社縁（今野氏・立道会員）、血縁（久保田会員）、地縁（小池会員）の実情を、既存の縁の変質ならびに友人関係を含めた選べる縁による代替と、そこに成立する新たな「共生の作法」いう観点から批判的に捉え返すのみならず、制度設計を含めた政治的・経済的・社会的なセーフティネットの再構築をいかに進めるべきかという実践的・政策的観点まで踏み込んだ議論が可能なメンバーであった。

大会前日までにごうしたコンセプトを報告者に共有してもらい、かつ報告者間の情報共有に努めることで筆者の仕事はほぼ完了し、テーマ部会当日は進行を行いつつ、フロアの聴衆とともに各報告者の報告（話題提供）とそれをもとにした討論を「観客」と同じ目線で臨むことができた。手前味噌で恐縮だが、事前打ち合わせである程度筋書きを知っていた筆者の目から見ても、「人間論的関心」や「社会問題的関心」、そして「社会・時代の診断」に富んだ社会学の牽引力を形作る「面白さ」と「切実さ」（船橋2012：21）を両立していたという意味で、「正しく」刺激的な部会であったように思う。これは、1）「若者」という語りを成立させていた一定の社会的・政治的・経済的条件崩壊後の「若者」を取り巻く現況、2）社会の再生産において最も弱い環になりつつあるという意味で共通性を持つ（「あつまり」としての）「若者」のありようとその中で「多様化」する生存戦略のあり方、そして3）「多様化」した「若者」を救い上げるセーフティネットや望ましいサポート体制の構築可能性という論点について、「中間集団の再構築」（久保田会員）という古くて新しい社会学の問題関心

のもとで議論を深めることができたことが非常に大きい。詳細は各報告者執筆の論文等に譲るとして、以下では上記2)の論点を中心に各報告者の報告概要をまとめておこう²⁾。

例えば、立道会員による「変容する現代若者の友人関係のネットワーク——日大生調査の結果から」では、「社会」に出るための資格取得やアルバイトにおける勤勉さと学業に対する不真面目さ・勉強嫌いという双方の側面を有する若者（「日大生」を含む大学生）に注目し、友人関係の質と量がいかにして社会生活を円滑に送るための資源（ソーシャル・キャピタル）として転化されているかについて、日大生と全国調査の比較を通じ明らかにしようとしている。全国調査といたしながら対象が東京都下に所在する私立大学生に限定されていること、日大生調査（集合調査＋郵送調査）と全国調査（Web調査）における調査モードの差異など様々な課題はあるものの、「若者」の生存戦略のなかで重要性を増す友人関係の有する意味とその多様性の把握という観点からするとこれらの点は些事にすぎない。立道報告において見据えられていたのは、「友人関係から得られる心理的な満足感や友人関係の維持を自己目的化」し「アルバイト交際費」捻出に精を出す友人関係を資源に転化できない一部の若者のすがたと、そうした若者の「不安」や承認欲求を利用して低賃金の労働力として（若者を）動員する現代日本の企業社会ないし資本主義社会の特徴であった。

この点と大きく響きあうのは、今野氏による「ブラック企業と就職活動」の報告である。今野氏による「ブラック企業」すなわち「違法な労働条件で若者を過剰に働かせる企業」（今野 2012：11）をめぐる問題構制は、立道会員が大学生という回路を通じてまなざしをに向けた使い捨て型の非正規雇用の増大を利用する企業の別な側面、正社員にも同様のメカニズムが働き若者を疎外している点に関心が寄せられているところにその特徴がある。「ブラック企業」において若者が直面する問題は、均質なライフコース、先述した山田の言うところのパイプラインからこぼれ落ちる「不安」を「内定」の獲得によって乗り越えようとする入り口部分での問題（「就職活動の諦念化サイクル」）と、心理学的手法を用いた「カウンセリング」やショック状態の演出、競争原理を導入して過剰労働を強いる「選別」プロセスに代表される入社後の問題に分類できるが、今野氏がいうようにこの問題は「見分けられなかった自己責任」として「若者」個人の選択に原因を帰する類のものではもちろんない。立道会員も指摘した現

代日本の資本主義体制下における労働・雇用を担う企業の問題として、さらにいえば「若者」の「働くこと」を取り巻く政治的・経済的・社会的条件の変化の帰結として捉えるべき問題である。学校教育から労働市場への移行過程に生じた歪みに着目し、論点の中に「就職活動」を含みこんだ立道会員ならびに今野氏のまなざしは、こうして社会的弱者として周辺化していく「若者」の共通性へと注がれているのだといえよう。

他方で、社会的弱者として周辺化していく若者自身も、自らの立ち位置に応じた生存のための戦略を立てながら、様々な生活実践／戦術を積み重ねている。近年散見される新自由主義的な政策が是とする規制と保護からの撤退や、「自己責任」「自助（ないし共助）」の必要性を説く言説が人々の孤立や生存をめぐる不安を喚起する中で、従来のある方から自由であり、かつ自身を守るための戦略を練りつつ積極的／消極的に活動する若者も増えてきた。例えば、「場所にとらわれずに自由に働く」「フリーランサーや個人事業主（自営業者）として、雇われずに働く」「ノマドワーカー」のあり方は（谷本 2013：3-5）、「貧困ビジネス」という「ブラック企業」と同茎の構造を持っているという事実関係やその効果の有無は別にして、「ブラック企業」で搾取される「社畜」とは異なる生存のための戦略であるし、立道会員の報告が明らかにしたような、橋渡し型のネットワークを形成するような外向きの人間関係への期待を抱き「弱い紐帯」（M.グラノヴェッター）維持にコストを支払ったり（「全国調査」型）、「孤立に対する強い不安」から結合型の内向きの人間関係を維持するためにアルバイトに精を出す（「日大」型）ような、友人関係のソーシャル・キャピタル化をめぐる実践も同様の意味を持つだろう。

この点に「住まうこと」の多義性ないし外延化という観点からの接近を試みたのが、久保田会員の「日本におけるシェアハウス／ルームシェアの現状と意義」、ならびに小池会員による「ベッドタウンの若者の社会関係——中年者・高齢者との比較から」の報告である。久保田会員は、不安定化する雇用と日本型企业の変化、それに非婚化・晩婚化によるポスト青年期の変化という政治的・経済的・社会的条件の変化を見据えつつ、団塊の世代の親によって保障されてきた生活レベル維持と仕事・生活・心理的不安定さ克服のための生活実践として、「他人とともに住まい、協力しながら生きていく」「シェアハウス」のあり方に注目し、家族とは異なる種類の共同性と、新しいライフスタイルの可能性を模索しようとする（久保田

2009：3-4)。その中で、選べない「縁」としての血縁に裏打ちされた近代家族中心の「住まい方」の歴史的特殊性に言及しつつ、「シェアハウス」という「住まい方」を新たな「若者」文化の亜種として捉えるのではなく、ポスト近代家族における「共同性」と「プライバシー」の両立可能性の模索の中に立ち現れる生存戦略として再定位すべき、との見解を示す。近年、政府や自治体主導による現状に対応する形で既存の「縁」の結び直しを企図した新たな「つながり」の再構築を促す政策的実践がコミュニティ（再）形成を促す言説と響き合う形で展開されているが³⁾、こうした言説や支援のあり方が（疑似的な）血縁集団としての家族的役割に依拠している点を射程に捉える久保田会員のまなざしは、「シェアハウス」という生活実践を通じて、「家族の中の他人や家族を越えた他人との、新しい生活の共同の可能性」という「第三の暮らし方」と、それを効果的に育んでいくための家族・市場・政府による「脱家族」の支援のあり方を問うていく必要性へと向けられているように思われる（ibid.：186-98）。

それに対し小池会員のまなざしは、（疑似的な）血縁集団としての家族的役割に依拠しつつ、感情的・情念的な結合と親睦的・相互交流を旨とするコミュニティを求めるとは異なる形で、地域社会へと回帰して生きていくことを選択した若者へと向けられている。「若者」の社会関係の希薄さ、すなわち既存の縁として「血縁」「地縁」「社縁」や、それとは異なる、友人関係や趣味仲間など今日的な「縁」としての「選択縁」（上野1987）に対するアクセスの乏しさというステレオタイプの把握に対し、「郊外」（≒ベッドタウン）で生きる若者は、高齢者に比べるとインフォーマル／フォーマルなグループ・団体への参加は少ないものの、友人ならびに近所の人との接触頻度という関係量においても、異なる世代や背景を有する人との交流ならびに親友や家族に代表されるソーシャル・サポート資源の有無といった関係の質においても、中年層に比べ十分な蓄積を見せている点を示唆するのである。この小池会員による知見は、筆者が専門とする都市社会学における、地域を越えて増大する親密な絆のネットワークの存在（中～遠距離の友人数の増大）に現代における「都市的なもの」を見出す「コミュニティ解放（変容）論」と軌を一にするように思われるが、より重要なのはくいま・ここ>における「郊外」が有する意味であり、若者が「郊外」で生きていく選択を行った背景であろう。例えば松本康は、自らが主張する「ネットワークの構造化」モデルをもとに、大都市におけ

る人口の世代的再生産の進展に伴い、「居住地の都市度が増すにつれて、友人数が増加する」という「友人興隆」仮説がもはや成立せず、濃密な関係性を旨とする「地元仲間集団」の代替として地元から30分から2時間圏内の中距離に住まう友人資源を有していることに特徴づけられる選択的なネットワークを「地元」出身者が保有するようになった点を指摘している(松本 2005: 147-61)。このような松本の知見は、関係資源を含めた様々な多様性が蓄積された空間として「郊外」が浮上してきていることを同時に示唆するものであり、同一階層の人々が均質的な生活環境へと「居住」するという90年代以前の理解を越えて、多様な関係資源を(ポジティブ/ネガティブな形で)選択し生活を組み立てていくという「郊外」ネイティブ⁴⁾の「住まい方」の存在とその多様性を看取するものとなっている。小池会員が提示した若者と高齢者の類似/相違点をめぐる論点は、こうした「郊外」ネイティブたちの「友人のあいだで暮らす」(C.S.フィッシャー)ことを通じた「他者との共生」という生存のための戦略として、そして久保田会員と同様に自発性・選択性の中で成立する「住まうこと」の多様化ないし外延化という文脈の中で理解すべきものだろう。

4. 「若者」を問うことと社会学的想像力の効能——むすびにかえて

ここまで走り抜けであるが、〈いま・ここ〉から「若者」を問うことの意味を探るべく、テーマ部会での各報告者の報告内容の整理・検討を試みてきた。4氏の報告は、〈いま・ここ〉から「若者」を問うことを通じ、1990年代以降変質したといわれる政治・経済・社会的条件を射程に収めつつ、それと向き合うための実践であったり、そうした実践を通じて見いだされる「社会変革の可能性」(小池会員)を戦略的に問題化している点で、非常に社会学的想像力に富んだものであった。「あつまり」としての「若者」という存在は、年長者に比べると政治的・経済的・社会的・文化的資源に乏しく、かつ自らの居場所を確立するために様々なコストを支払わなければならないという意味で確かに「社会的弱者」とみなしうる境遇にある。しかしながら、「社会的弱者」の立場におかれる脆弱な存在とみなしうるのは、一部の高齢者や貧困層、障がい者など、何も「若者」だけではない。それでもなお「若者」を問題とするのは、未婚化・晩婚化という人口学的水準から社会的水準にいたる社会的再生産の困難が最も先鋭的に表れてくる層であり、社会やみずからを取り巻く様々な揺らぎや閉塞感

と向き合いつつ、特定の価値意識や信念体系を相対化する新たな前提やアプローチをもって何とかそうした境遇から脱却しようとする営みの中に、「社会変革の可能性」の萌芽を看取させる存在でもあるからである。変わりゆくあるいは変わりつつある社会のすがたを捉えるとともに、望ましい社会を実現していくための諸条件とその方向性を模索していく上での様々な「材料」を集めていく、このような戦略的な問題化にこそ、「若者」論の重要性は見いだされるのだといえよう。

その点を踏まえた上でいま・ここにおいて「若者」を問うていこうとする時、今回のテーマ部会において積み残された課題もおおのずと見えてくる。本稿のなかでも繰り返し触れてきた「あつまり」としての「若者」に内在する多様性が、「若者」という「あつまり」や社会の再生産に対し、どのような効果ないし意味を有しているかという点である。その際一番わかりやすい多様性の指標となるのは、性別、地域、階層といった社会学における基本的かつ根本的な分類基準であろう。例えば、小池報告が示した「社会関係が十分にもにもかかわらず孤立感が増大する」若者像についてフロアから多くの質問が寄せられたが、「孤立感」の規定要因を考えるのにあたっては、それが関係の質の異なるのか、関係資源へのアクセスの違いがもたらすものなのか、はたまた「郊外」という地域効果によるものなのか、の判断が難しい⁵⁾。地域分類ごとの若者内部における階層的地位や関係資源へのアクセスの違いを検討した上で、仮にそれを越えて全般的に「孤立感」が高いという結果が出るのだとすれば、なぜ「若者」のみにそうした傾向があらわれるのか。逆に差異が生まれるとすれば、その違いにはどのような含意があるのか、という形の問いを戦略的に立てることが次の段階では肝要となる。そのことが社会の再生産に対する若者内部の多様性が有する効果や意味へと接近しつつ、それを踏まえた制度設計をいかに考えていくかというような、より本質的な問いへの回路を新たに開いていくこととなるだろう。

ともあれ本稿では、私たちの存在や自己理解をめぐるミクロな問いと、「社縁」「地縁」「血縁」「選択縁」といった「選べる／選べない縁」の変質をめぐるメゾな問い、政治的・経済的社会的条件の変質による未婚化・晩婚化といった社会的再生産の悪化や制度設計の硬直をめぐるマクロな問い、という三者をつなぎ合わせて考える社会学的思想力が、社会のあり方が極度に不安定だとみなされる現代日本社会においてより光芒を放つ点、

「ブラック企業」問題の解決を図るような「戦略的行動」（今野 2012：238）に社会性を付与する源泉となりうる点のみ確認しつつ、報告者諸氏へとバトンを手渡すこととしたい。

付 記

テーマ部会当日に寄せられた質問については、時間の関係上テーマ部会中にすべてを消化しきれてはいないため、以下に要約した内容を紹介することとする。当日の会場の「熱気」が少しでも会員諸氏に伝わり、「若者」論のさらなる深化へとつながっていく一助となることを祈念したい。

今野晴貴氏

- ・「ブラック企業」増加についての、市場の変化以外の要因
- ・「ブラック企業」に対する理念型としての「ホワイト企業」のイメージ
- ・「ブラック企業」問題に対する政治的・社会的介入が遅延する要因
- ・日本企業の「ブラック企業」化に対する対処の方針や具体的な方法
- ・「若者」の使い捨てが常態化する日本社会への処方箋
- ・「若者」が「労働法」学習をはじめとする知恵・知識を習得する効能

立道信吾会員

- ・大学生の「学業不振」の有する意味（交友関係・学業・就職の三者の関係性）
- ・「学業とアルバイトの両立」言説の意味
- ・「結合型」人間関係を示す要因（「日大」型）
- ・「結合型」人間関係を示す「日大」型への伝統的気質の影響
- ・「結合型」人間関係とバイトへの没入の関係性（「日大」型）
- ・日大生内部における「橋渡し型」ネットワーク保持者の有無と「全国調査」型との相同性
- ・「日大」型ソーシャル・キャピタルの質的变化をもたらすための条件
- ・ソーシャル・キャピタルと若者の「幸福」度の関係性

久保田裕之会員

- ・居住形態の変化をめぐる文化的背景（パラダイム・シフトのきっかけ）
- ・シェアハウスを選択する要因としての経済的理由の内実
- ・「他者とともに暮らす」選択を行う／行わない、そうした「居場所」に到達できる／できない「若者」の差異とその背景
- ・シェアハウスという「住まい方」と「メディア経験」（Ex.テレビドラマ）

の関係性

小池高史会員

- ・「社会関係が高まるにもかかわらず孤立感が上昇する」メカニズムと若者内部の差異
- ・「孤立感」規定要因としての諸効果（住居形態、居住形態、居住年数、地域効果など）
- ・中年層の地域社会回帰への方策
- ・分析上の操作的定義（「若者」「ベッドタウン」ほか）

注

- 1) 国立情報学研究所「学術情報データベース・リポジトリ」版（データバージョン9.6）を使用（2014年1月31日アクセス）。ちなみに類似概念としての「青年」の場合には、743件の文献がヒットする。
- 2) 以下の記載は、特別の記載がない限り、テーマ部会当日に配布された各人のレジュメを参照しつつ、当日の報告内容を筆者なりの視点で再構成し直したものである。そのため各報告者の問題意識や、解釈とは必ずしも合致しない点があることを改めて付言しておく。なお、各報告者の問題意識やそれに対する考えについては、是非とも以降に掲載されている各論文をご一読願いたい。
- 3) 詳細については、（松橋 2012）を参照。
- 4) 「郊外」ネイティブとは、2000年代後半にあらわれてきた外側から一方的に「郊外」ないし「郊外的なもの」を批判するのではなく、郊外を所与のあたりまえのものとしてみなしながら、その多様性やポジティブな部分を積極的に語っていく、郊外で生まれ育った世代を指す。詳しくは、（近森・工藤 2013）等を参照。
- 5) フロアからの質問については、付記を参照。

主要参考文献

- 阿部真大, 2006, 『搾取される若者たち』集英社.
- 浅野智彦, 2012a, 「若者」大澤真幸ほか編『現代社会学事典』弘文堂：1367-8.
- , 2012b, 「若者論の現在」『青少年問題』648：8-13.
- 近森高明・工藤保則編, 2013, 『無印都市の社会学』法律文化社.
- 松橋晴俊, 2012, 『社会学をいかに学ぶか』弘文堂.

- 古市憲寿, 2012, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 古市憲寿・本田由紀, 2010, 『希望難民ご一行様』光文社.
- 今野晴貴, 2012, 『ブラック企業』文藝春秋.
- 小谷 敏, 2013, 「もちあげ・たたき・あきらめさせる」『青少年問題』649: 2-7.
- 久保田裕之, 2009, 『他人と暮らす若者たち』集英社.
- 齋田竜蔵, 2011, 「過剰包摂される地元志向の若者たち」樋口明彦ほか編『若者問題と教育・雇用・社会保障』法政大学出版局: 183-212.
- 松橋達矢, 2012, 「多様化する都市地域社会における『つながり(地縁)』の現在」『社会学論叢』173: 9-40.
- 松本 康, 2005, 「都市度と人間関係」『社会学評論』56(1): 147-64.
- 谷本真由美, 2013, 『ノマドと社畜』朝日出版社.
- 上野千鶴子, 1987, 「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『現代日本における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版: 226-43.
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会』筑摩書房.